東海学園大学教育研究紀要　第７号：28-42，2022

〈原著論文〉

長野県長野高等女学校における卒業生の進路

烏田直哉 *

はじめに

本稿では、長野県長野高等女学校（以下、「長野高女」とする）を一つの事例として取り上げ、同校の同窓会報である『同協会報』[1] などから得られる情報を基に、卒業生の進路について明らかにする。花井信も指摘するように、長野県は全国有数の製糸業集積地帯であり、工場内不就学学齢児童のために特別学級が設けられた[2]。しかし県都であった長野市においては、県の中枢機関や中央官庁の出先機関などが集まり、製糸業は発達しなかったと言われる[3]。こうした地域的な特性が卒業後の進路にどのように反映したのか考察を試みる。

高等女学校の性格について、古くは深谷昌志が『良妻賢母主義の教育』[4] で言及している。主に明治期の女子教育に焦点を当て、それを貫く原理に「良妻賢母」が存在したこと、特に中等教育において強調されたことを指摘した。その後、高等女学校卒業生の進路に関わる研究は、教育史、教育社会学などの分野において論じられてきた。天野郁夫らの「戦前期中等教育における教養と学歴」[5] では、兵庫県篠山地域の女子中等教育機関（篠山高等女学校）に焦点を当て、教育実態を明らかにしている。この研究の中で、吉田文が同校の「社会的機能」について考察を行っている。「入学時の選抜」として出身階層や入学の動機について述べ、また「卒業後の配分」として卒業直後の進路や結婚について分析している。その結果、「制度化された教育資格・職業資格として社会的な流通性を持つことは少ない」[6] こと、経済的な条件が同じでも親の職業によって高等女学校に対する「教育期待」[7] が異なっていたことなどを指摘した。例えば、商業を家業とする女子に対しては、円滑な対人関係を築くことができるような教養などを求め、農家では経済的条件にかかわらず女子に対する教育に否定的であったと述べている[8]。

水野真知子は、幕末維新期から筆を起こし昭和戦前期までの女子教育改革について『高等女学校の研究』[9] で考察した。同書では、高等女学校を中心とした女子教育の史的展開を叙述する中で、1910 年代後半の変化について指摘している。すなわち、「良妻賢母主義を前面に標榜してきた高等女学校教育においてさえ（中略）賃金収入に結び付く活動の素地を与える必要があると考えられる」[10] ようになり、また、昭和期に入ると「女子労働力への依存度が高ま」[11] ったと指摘している。

高等女学校卒業直後のみならず、その後のライフコースまで含めて考察した研究に井上好人「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能」[12]、土田陽子「地方における高学歴女性のライフコース選択」[13] などが挙げられる。井上は、石川県立第一高等女学校の同窓会活動に着目し、卒業後の「現実生活のポジション」が同窓会活動への関わり方を決定すると述べている。また、土田は和歌山高等女学校卒業生のライフコース選択について、昭和 4 年から同 22 年の卒業者を対象に分析した。その結果、7 割が進学していたこと、その進学の背景には、「家庭の事情や家庭の教育方針が深くかかわっていた」こと、同校の専攻科進学は「専業主婦志向の親にとっても娘にとっても、うってつけの進学先だった」[14] ことなどを指摘している。「家庭の事情」やその「教育方針」については、井本佳宏が「戦前期における女子中等教育システムの形成とその構造」において、「教育システムと家族システム」が構造的にカップリングをなしていたと言い表している[15]。

* 東海学園大学教育学部

一部ではあるが、高等女学校の社会的機能に関する以上の先行研究から、親の職業が高等女学校への進学（あるいはその後の、補習科や専攻科など付設課程も含めた進学）と関わりがあること、高等女学校卒業とその後の結婚あり方が強く結び付いていたこと、「良妻賢母」を育てることを前提としつつも時代を経るに従いその性格が変化し「職業資格」を与えるという機能が強まったこと、などが分かる。本稿では、こうした高等女学校の性格を踏まえた上で、長野高女にどのような特色がみられたのかを考察する。

長野高女は、高等女学校規程が公布された翌年、明治29年４月、「町立長野高等女学校」として誕生した[16]。校舎は長野高等小学校の校舎の一部を利用したとされる。明治30年の長野市制施行とともに[17]「長野市立長野高等女学校」と改称した[18]。明治32年に高等女学校令が公布され、その第２条で「北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スヘシ」、第３条で「前条ノ高等女学校ノ経費ハ北海道及沖縄県ヲ除ク外府県ノ負担トス」と定められた。また、第５条では「郡市町村立ノ高等女学校ニシテ府県立高等女学校ニ代用スルニ足ルヘキモノアルトキハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ府県費ヲ以テ相当ノ補助ヲ与ヘ第二条ノ設置ニ代フルコトヲ得」と定められた。これをうけ、長野県では臨時県会において、長野、松本、上田、飯田の４か所に高等女学校を設置する方針をかためた。しかし、その設置者について、「管理上も経済上も行き届きかねる」[19]ため、しばらくは県立高等女学校を設けず、高等女学校令第５条を適用した「県立代用」の高等女学校が設けられた。明治33年４月、長野市立長野高等女学校を県立として代用することとなり、さらに翌34年４月には町立松本高等女学校、郡立上田高等女学校、郡立下伊那高等女学校が開校した。県立代用であった長野、松本、上田、飯田の４高女は、明治42年に県立に移管された[20]。

本稿では、まず、『長野県立長野高等女学校一覧』[21]から明治期末期の同校卒業生進路についておさえる。次に大正期、昭和期については『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』などの統計と共に、断片的ではあるが筆者が収集した『同協会報』から分かる範囲で長野高女の卒業生進路について検討する[22]。

１．明治期の進路動向

【図表１】は、明治44年および明治45年の『長野県立長野高等女学校一覧』に掲載されている、「卒業生ノ情況」である。【図表１】の最右列「卒業生徒数」は、左列の合計を示した数字ではない。例えば、「小学校教員」として勤めながら「結婚セルモノ」にもカウントされている、あるいは卒業後「女子高等師範入学」をして、しばらくして明治45年時点で結婚したケースなども考えられ、重複している可能性もある。

そのような前提で、【図表１】から分かることとして、次のことが指摘できる。

第一に、この期間、多くの年度で最多を占めたのは「家庭ニ在ル者」であり、それが占める比率は後になるほど上昇している。上昇していったのは、卒業後、家庭外にあった者が年数を経て「家庭ニ在ル」状況に変化していったことなどが理由として考えられる。また、第二に、「結婚セルモノ」も明治30年代前半においては「家庭ニ在ル者」と同程度を占めていたが、後になるほど低くなっている。これも同様、卒業後、年数を経て、結婚した者が増加していったことによるものと考えられる。

つまり、この「卒業生ノ情況」は、明治30年度以降、各年度の卒業者が明治44年、あるいは45年の時点でどのような状況にあるのかを示しているのである。卒業直後にどのような進路をとったのかについては、「補習科入学」「女子高等師範入学者」「其他学校入学者」などには反映されていると考える。

「家庭ニ在ル者」についで多かった補習科に進んだ卒業生についてみると、この期間、「卒業生徒数」に占める比率は１割から２割の間で推移しており、多いときで70人、およそ６割に及んでいる。二次史料ではあるが、長野県長野西高等学校の学校史、『百年のあゆみ』[23]中、「同協会九十年のあゆみと会員の息づかい」に掲載されている「会員の消息欄から」より、補習科へ進んだ者の卒業後の様子について一例を挙げる。例えば、明治39年４月の『同協会報』発刊時の記述として、「Ｂ嬢」について「補習を終へ三水小学に田舎の小供を薫陶の徳高しと聞く昨年検定を経て金箔付となられたれば向後着実な

【図表 1】「卒業生ノ情況」明治 44 年→明治 45 年

卒業年度	補習科入学	同上卒業者	女子高等師範入学者	同上卒業者	其他学校入学者	同上卒業者	小学校教員	其他学校教員	官衙会社等事務員其他	家庭ニ在ル者	結婚セルモノ	死亡者	卒業生徒数
三十年度			3→ 3	3→ 3	3→ 3	3→ 3	1→ 1	1→ 1		10→ 10	13→ 13	5→ 5	17→ 17
卅一年度	9→ 9	8→ 8	2→ 2	1→ 1	4→ 4	3→ 3	3→ 3		1	13→ 12	11→ 12		15→ 15
卅二年度	12→ 12	6→ 6	3→ 3	2→ 2	2→ 2	1→ 1	2→ 2	1→ 1		21→ 20	23→ 23	1→ 1	24→ 24
卅三年度	25→ 25	23→ 23	2→ 2	2→ 2	10→ 10	5→ 5	4→ 6	1→ 2	1→ 1	34→ 34	33→ 33	2→ 2	42→ 42
卅四年度	37→ 37	28→ 28	1→ 1	1→ 1	8→ 8	8→ 8	2→ 2	1→ 1	1	37→ 37	32→ 37	6→ 7	47→ 47
卅五年度	27→ 27	22→ 22			5→ 5	2→ 2	7→ 3	1→ 1	2→ 1	39→ 46	40→ 41	5→ 5	52→ 52
卅六年度	70→ 70	28→ 28	6→ 6	6→ 5	8→ 8	5→ 6	11→ 8	7→ 7	4→ 6	81→ 80	66→ 70	11→ 11	114→ 114
卅七年度	44→ 44	25→ 25	3→ 4	1→ 2	7→ 7	4→ 5	12→ 9	1→ 3	1→ 3	71→ 70	54→ 62	4→ 5	92→ 92
卅八年度	32→ 32	18→ 18	1→ 1		13→ 13	2→ 3	10→ 7	2→ 2	3→ 3	58→ 60	40→ 43	5→ 6	79→ 79
卅九年度	35→ 35	22→ 22			14→ 14	1→ 3	14→ 11		1	43→ 51	16→ 25	1→ 1	68→ 68
四十年度	46→ 46	21→ 21	1→ 2	1	10→ 11	2→ 3	17→ 15	2	1	61→ 66	20→ 26	1	86→ 86
四十一年度	28→ 28	8→ 8	1→ 2		17→ 19	8→ 9	13→ 12			59→ 61	10→ 16	2→ 3	82→ 82
四十二年度	29→ 29	7	2→ 3		9→ 9	1	1→ 2			65→ 72	4→ 9	1→ 1	86→ 86
四十三年度	27→ 27		2		19		2→ 3		1→ 1	55→ 66	1→ 6		102→ 102
四十四年度	18		1		2		1			63	3	1	→ 86
計	421→ 439	209→ 216	25→ 32	16→ 17	110→ 134	44→ 52	99→ 85	15→ 20	15→ 16	647→ 748	363→ 419	43→ 49	906→ 992

（長野県立長野高等女学校編『明治四十四年五月　長野県立長野高等女学校一覧』（明治45年2月、28-29頁）、同編『明治四十五年五月　長野県立長野高等女学校一覧』（大正元年12月、26-28頁）を基に作成した。なお、縦書きを横書きに改め、生徒数については漢数字を算用数字に改めた。網掛けは筆者によるもので、明治44年と45年とで数字が異なる項目である。）

る腕を振るい給ふにも便なるべし偏にその成功を祈る。」[24] という「消息」が掲載されている。補習科を卒業した後に三水尋常高等小学校に勤め、教員検定を受けたことが分かる[25]。

女子高等師範学校への進学は毎年若干名であり、最も多い明治 36 年度で 6 名を数えるに過ぎない。学校種は不明だが「其他学校」、おそらく専門学校や各種学校などをさすものと思われるが、これに進んだ者は多いときで 20 名近くに達している。

2.『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』にみる進路動向

大正から昭和にかけて、長野県における高等女学校の卒業生が、卒業後にどのような進路をたどったのかについて、全国的な動向と比べながら刊行された統計を用いておさえておく。

【図表 2】は、『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』[26] 中の「前学年度卒業者状況ニ関スル調」より作成した進路（「更ニ学校ニ入リタルモノ」「教員トナリタルモノ」「其他ノ職ニ就キタルモノ」「其他ノ者」）の比率の推移である。全国平均値、長野県平均値、明治 20 ～ 30 年代に設置された 4 高女（長野、松本、上田、飯田の各高等女学校）の値を示した。

単純に比較することはできないが、ほぼすべての年において、長野県の「更ニ学校ニ入リタルモノ」の比率は全国平均よりも高かったことが分かる。長野高女に着目すると 1923 年、1926 年、1928 年、1933 年を除き、その値は全国平均を上回っていた。また、松本高等女学校の値も長野高女に拮抗していた。「教員トナリタルモノ」については、4 高女とも 1910 年代を除いてほとんどみられない。「其他ノ職ニ就キタルモノ」をみると、全国的にその比率は上昇していったことが分かる。長野県においては、1920 年代において全国平均を上回る年が多かったが、1930 年代前半では低下しており、後半になると上昇していった。

『長野県教育史』では、女子中等教育を求める「社会層」について記述されている[27]。すなわち、「農村不況下に一人前の労働力を割いて高等女学校に通学させることは、決して容易なことではなかった」[28] こと、一方で、新中間層が高等女学校の教育内容を支持したことなどである。また、冒頭にも述べた通り、製糸産業が盛んな長野県において、不就学学齢児童のために、本校内の特別学級、あるい

【図表 2】高等女学校卒業生の進路

西暦	更ニ学校ニ入リタルモノ(%)						教員トナリタルモノ(%)						其他ノ職ニ就キタルモノ(%)						其他ノ者(%)					
	全国	長野県	**長野高女**	松本高女	上田高女	飯田高女	全国	長野県	**長野高女**	松本高女	上田高女	飯田高女	全国	長野県	**長野高女**	松本高女	上田高女	飯田高女	全国	長野県	**長野高女**	松本高女	上田高女	飯田高女
1915	19.2	18.6	**43.4**	8.8	27.5	2.9	3.2	0.4	**1.8**	0.0	0.0	0.0	2.9	0.9	**0.0**	0.0	2.9	1.4	74.6	80.2	**54.9**	91.2	69.6	95.7
1917	20.2	26.4	**32.3**	49.1	27.1	12.9	3.7	3.1	**0.8**	0.0	0.0	6.5	2.5	0.5	**2.4**	0.0	0.0	0.0	73.7	70.0	**64.6**	50.9	72.9	80.6
1918	20.4	21.8	**40.7**	51.3	5.7	3.9	5.8	6.5	**4.2**	0.6	4.9	13.7	3.4	0.9	**0.8**	0.0	0.0	2.0	70.4	70.7	**54.2**	48.1	89.4	80.4
1919	21.7	26.2	**44.3**	43.4	30.0	14.0	7.2	2.6	**0.7**	0.0	4.2	2.3	4.9	0.9	**2.1**	0.0	1.7	0.0	66.2	70.2	**52.9**	56.6	64.2	83.7
1920	23.4	29.1	**38.8**	50.6	37.3	12.1	7.6	3.3	**1.5**	0.0	4.8	3.4	4.4	3.4	**6.7**	0.0	4.0	0.0	64.6	64.3	**53.0**	49.4	54.0	84.5
1921	23.3	37.0	**33.1**	37.7	27.7	43.5	5.7	0.9	**0.0**	0.0	0.0	4.3	4.0	1.2	**2.6**	0.7	0.0	0.0	67.0	61.0	**64.3**	61.6	72.3	52.2
1923	26.3	30.2	**15.6**	18.3	50.7	24.6	4.6	1.7	**0.0**	0.0	0.7	0.0	4.3	10.6	**3.3**	5.5	3.7	0.0	64.8	57.5	**81.1**	76.2	44.8	75.4
1924	27.0	29.8	**38.7**	40.6	38.7	17.0	3.6	1.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	4.3	11.6	**2.9**	0.0	0.0	0.9	65.1	57.4	**58.4**	59.4	61.3	82.1
1926	26.1	26.6	**20.2**	19.8	27.4	23.5	2.1	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	3.7	7.9	**9.0**	4.4	0.5	2.5	68.0	65.3	**70.7**	75.8	72.0	73.9
1927	25.7	36.4	**27.0**	40.0	33.3	37.0	1.7	0.6	**1.4**	0.0	0.0	0.0	3.9	3.6	**7.1**	2.2	5.4	3.4	68.6	59.4	**64.5**	57.8	61.2	59.7
1928	25.1	29.9	**17.6**	28.3	20.9	23.0	0.9	0.1	**0.6**	0.0	0.0	0.0	3.8	4.3	**6.3**	0.6	0.7	0.8	70.1	65.7	**75.6**	71.1	78.4	76.2
1929	22.7	28.4	**29.8**	29.3	18.4	19.0	0.7	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	4.5	3.1	**2.3**	1.3	1.1	1.2	72.1	68.4	**67.9**	69.5	80.5	79.8
1930	22.5	29.4	**30.5**	20.9	22.8	19.1	0.5	0.0	**0.0**	0.0	0.0	0.0	4.7	2.3	**0.5**	1.3	0.0	1.2	72.3	68.3	**69.1**	77.8	77.2	79.8
1931	20.4	26.3	**27.2**	25.3	13.2	7.9	0.3	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	5.6	3.7	**0.0**	2.6	0.0	0.6	73.7	69.9	**72.8**	72.1	86.8	91.5
1932	21.0	33.3	**26.3**	31.4	33.7	17.8	0.3	0.0	**0.0**	0.0	0.0	0.0	6.6	4.5	**2.1**	4.5	1.6	3.2	72.2	62.3	**71.6**	64.0	64.7	79.0
1933	22.2	27.9	**20.5**	29.3	17.7	22.4	0.4	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	7.1	6.0	**3.6**	17.0	2.8	1.9	70.2	66.0	**75.9**	53.7	79.6	75.8
1934	23.7	33.8	**27.6**	29.1	14.7	19.0	0.5	0.0	**0.0**	0.8	0.0	0.0	7.9	4.3	**2.9**	8.0	1.5	3.2	68.0	61.9	**69.5**	62.0	83.8	77.8
1935	24.8	30.5	**38.6**	37.2	47.8	17.3	0.5	0.0	**0.0**	0.0	0.5	0.0	8.4	6.5	**6.7**	3.8	11.0	6.5	66.3	63.0	**54.7**	59.0	40.7	76.2
1936	24.8	31.6	**34.6**	41.1	18.6	32.9	0.4	0.0	**0.0**	0.0	0.0	0.0	9.6	9.4	**14.8**	11.4	7.1	8.2	65.2	58.9	**50.5**	47.5	74.3	58.9
1937	26.1	37.5	**40.7**	34.2	49.1	41.6	0.9	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.7	11.0	9.4	**7.5**	6.0	8.7	10.1	62.1	53.0	**51.8**	59.8	42.2	47.7
1938	28.0	38.0	**38.5**	41.4	45.1	34.3	1.4	0.1	**0.0**	0.0	0.0	0.0	12.7	13.6	**20.0**	5.7	6.1	9.1	58.0	48.3	**41.5**	52.9	48.8	56.6
1915-1938 平均	23.6	29.9	**31.7**	33.7	28.9	21.2	2.5	1.0	**0.5**	0.1	0.7	1.5	5.7	5.2	**4.9**	3.6	2.8	2.7	68.3	63.9	**62.8**	62.7	67.6	74.6

〔文部省普通学務局編『全国〈高等女学校実科高等女学校〉ニ関スル諸調査』、大正 5～昭和 15 年（国立国会図書館デジタルコレクション）より作成。〕

は製糸工場内に設けられた特別学級が一つの学びの場になっていた[29]。長野県に限ったことではないが、中等教育、とりわけ女子中等教育を受けられる「社会層」は限られていた。高等女学校入学者の親の職業についてみると、【図表 3】の通り、長野高女や松本高女においては、農業の比率が商業のそれを上回っていた。また、長野高女にあっては公務自由業が他の高女に比べ突出して高い比率を占めていた。本稿では長野高女における入学者の親の職業まで含めた考察はしないが、高等女学校への進学、あるいはその後の進路を考える際、このような長野市の社会経済的な条件を考慮する必要があろう。

3.『同協会報』にみる大正期の進路動向

大正期における卒業生の進路について『同協会報』の記述内容から検討する。

「同協会」と校友会との違いについて、学校史には、「校友会は、卒業生を中心にした同協会に対して、生徒を中心にした学校生活の組織」[30] とあり、校友会とは別の、一般で言うところの同窓会であることが分かる。「同協会」とした意図については、長野県長野西高等学校の『七十年のあゆみ』に、「同協会の『協』という字を分解すると（劦と十）となり、これは卒業生みんながその持てる力を結集し、心を同じくし、よきハーモニイをもって進んで行こう会という意味か」[31] と記述されている。

大正 13 年 7 月の『同協会報』第 19 号に掲載された「母校記事自大正十二年六月至大正十三年六月」[32] にこの頃の進路に関わる記述がみられる。このうち、「大正十二年度学事報告」によると、「本年度（第廿七回）卒業生ニ就キテ」、この時「卒業セシモノ、数」は 173 名であり、「志望別ニスレバ」として、進路希望の情況が示されている。これを【図表 4】のようにまとめた。

希望する進学先として最も多いのは、「専攻科」でおよそ 2 割に上っている。『長野県教育史』によると、元々、長野高女には「女子高等師範学校への受験準備の目的も兼ねる」[33] 補習科が設置されていた。しかし、志願者が減少し、その「教育効果も疑問とみる県当局」[34] が、大正 13 年の専攻科設置ととも

【図表 3】「高等女学校・実科高等女学校入学者の父兄職業別（大正 9 年度）」

学校名		農業	水産業	鉱業	工業	商業	交通業	公務自由業	その他有業者	無職	計
高等女学校	**長野**	**12 (11.5%)**			**6 (5.8%)**	**38 (36.5%)**		**42 (40.4%)**	**1 (1.0%)**	**5 (4.8%)**	**104 (100.0%)**
	松本	27 (26.0%)	1 (1.0%)		10 (9.6%)	41 (39.4%)		20 (19.2%)	5 (4.8%)		104 (100.0%)
	上田	37 (37.4%)		1 (1.0%)	6 (6.1%)	31 (31.3%)	1 (1.0%)	19 (19.2%)		4 (4.0%)	99 (100.0%)
	飯田	35 (36.8%)			11 (11.6%)	31 (32.6%)		17 (17.9%)		1 (1.1%)	95 (100.0%)
	諏訪	31 (31.3%)			8 (8.1%)	40 (40.4%)	2 (2.0%)	13 (13.1%)	2 (2.0%)	3 (3.0%)	99 (100.0%)
	伊那	24 (50.0%)			3 (6.3%)	12 (25.0%)		9 (18.8%)			48 (100.0%)
	平野	8 (16.0%)			9 (18.0%)	22 (44.0%)	4 (8.0%)	7 (14.0%)			50 (100.0%)
	南佐久	55 (55.0%)				32 (32.0%)		13 (13.0%)			100 (100.0%)
	大町	14 (35.0%)			2 (5.0%)	18 (45.0%)		6 (15.0%)			40 (100.0%)
	計	243 (32.9%)	1 (0.1%)	1 (0.1%)	55 (7.4%)	265 (35.9%)	7 (0.9%)	146 (19.8%)	8 (1.1%)	13 (1.8%)	739 (100.0%)
実科高等女学校	長野実科	22 (30.6%)			6 (8.3%)	32 (44.4%)		12 (16.7%)			72 (100.0%)
	上田実科	28 (66.7%)				8 (19.0%)		4 (9.5%)		2 (4.8%)	42 (100.0%)
	岩村田実科	31 (68.9%)			2 (4.4%)	6 (13.3%)	2 (4.4%)	4 (8.9%)			45 (100.0%)
	小諸実科	32 (64.0%)			4 (8.0%)	7 (14.0%)	1 (2.0%)	2 (4.0%)	1 (2.0%)	3 (6.0%)	50 (100.0%)
	埴科実科	33 (97.1%)				1 (2.9%)					34 (100.0%)
	松代実科	7 (50.0%)				3 (21.4%)		4 (28.6%)			14 (100.0%)
	須坂実科	12 (46.2%)			4 (15.4%)	8 (30.8%)		2 (7.7%)			26 (100.0%)
	中野実科	20 (47.6%)				19 (45.2%)		3 (7.1%)			42 (100.0%)
	計	185 (56.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	16 (4.9%)	84 (25.8%)	3 (0.9%)	31 (9.5%)	1 (0.3%)	5 (1.5%)	325 (100.0%)

（長野県教育史刊行会編『長野県教育史　第三巻　総説編三』長野県教育史刊行会、昭和58年、354頁より。各学校の比率は筆者が付記した。）

に廃止した。専攻科の「設置の趣旨」については『同協会報』第 19 号に、以下のように記されている。

【図表 4】卒業後の進路希望（大正 13 年 3 月）

志望進路	人数	（比率）
専攻科	37	(21.4%)
日本女子大学	2	(1.2%)
師範二部	24	(13.9%)
音楽学校	1	(0.6%)
京都府立高女専攻科	1	(0.6%)
女子医専	1	(0.6%)
朝鮮教員養成所	1	(0.6%)
不明	5	(2.9%)
家庭ニ入ルモノ	101	(58.4%)
計	173	(100.0%)

（長野高等女学校同協会編『同協会報』第 19 号、大正 13 年 7 月、23 頁を基に作成。なお、縦書きを横書きに改め、漢数字を算用数字に改めた。比率は筆者が付記した。）

> 専攻科が本県に設けらるゝに至つた趣旨に就ては（中略）国家の健全なる発達は男女の共同扶助に俟たなければならぬのであり其為めには男女の間に甚しき教育程度の差等の無いようにしなければならぬ。（中略）夫で本県に於ては三市高等女学校に夫々専攻科を置き上述の欠陥を補ふ趣旨で以て県会に提案して其協賛を求むるに至つたのである。而して其高等科でなく専攻科を採用するに至つた理由は高等科が将来に於て帝国大学と連絡が付くようになる暁は兎も角として今日に於ては夫れが無く唯普通に凡ての学科を修むると云ふ所から現状兎角不振の状態にある。之に反して専攻科は或る一学科を中心として之を専攻し同時に他の学科を適当に案配して人格修養を為さしむるので高等科に比し纏りがよく政府の特典もあり将来就職の便宜もあり従て各地共専攻科の方、入学志願者も多いと云ふ統計上の事実に鑑みた結果である。[35)]

まず、「国家の健全なる発達は男女の共同扶助に俟たなければなら」ない、また、「男女の間に甚しき教育程度の差等の無いようにしなければなら」ないと、男女の教育機会の均衡について述べている。長野県においては、「三市」すなわち長野、松本、上田の三つの「高等女学校に夫々専攻科を置き上述の欠陥を補ふ趣旨で以て県会に提案して其協賛を求」めた。さらに、「高等科でなく専攻科を採用するに至つた理由」として、「帝国大学と連絡が付く」ことについて、高等科でも未だ「今日に於ては夫れが無」い、「之に反して専攻科は或る一学科を中心として之を専攻し」「政府の特典もあり将来就職の便宜もあり」有効性が高いと主張している。こうして、長野県では大正 12 年の県会で専攻科の設置が決まり、大正 13 年 4 月より長野高女に国語科、松本高女に家事科、上田高女に裁縫科の専攻科が一学級ずつ設

けられた[36]。

上に示した「将来就職の便宜」というのは、卒業後の中等教員資格取得などをさすものと考えられる[37]。また、『長野県教育史』によると、専攻科の第一回卒業生について、「試験検定で小学校本科正教員の免許が与えられ」[38] たと記述されている。

【図表５】『同協会報』にみる卒業後の進路（大正９～13年）

卒業年	進学						就職							記載なし	計
	専門学校・高師	師範学校・その他教員養成諸学校	その他中等学校	高女専攻科・補習科等	各種学校	計	中等学校等教員	小学校教員	その他教育従事	その他公務等	会社等	不明	計		
大正９年	6					6	1	8	1		3		13	106	125
大正10年	8	1	2		1	12	1	15		1	3		20	118	150
大正11年	6		1	1	1	9		3	1		2	2	8	137	154
大正12年	6	10	1	13	3	33		3		1	2		6	142	181
大正13年	1	15		22		38				1			1	134	173
通算	27	26	4	36	5	98	2	29	2	3	10	2	48	637	783
(比率)	(3.4%)	(3.3%)	(0.5%)	(4.6%)	(0.6%)	(12.5%)	(0.3%)	(3.7%)	(0.3%)	(0.4%)	(1.3%)	(0.3%)	(6.1%)	(81.4%)	(100.0%)

（長野高等女学校同協会編『同協会報』第19号、大正13年、39-56頁を基に作成。以下、【図表6】【図表7】も同じ。）

先の【図表４】は志望した進路である。実際の進学先等はどうだったのか、大正13年の『同協会報』第19号巻末の「会員名簿（大正十三年五月末日現在）」[39] に見てみよう。この名簿には氏名とともに進学先などが記されている。第19号発行の直近５年（大正９年から13年）卒業者に限って集計したものが【図表５】である。進学先と思われる学校名が記載されていたケースは通算して98例あった。卒業後の年数を経るほど進学先名が記載されているケースが減少し、その一方で勤務先の小学校名などが記載されている例が多くなっている。また、記載のないケースが80％余りと大半を占めている。ただし、先の【図表４】と照らし合わせると、この「会員名簿」に卒業後の進路がすべて示されているとは考えられない。

【図表６】『同協会報』にみる進学先学校名称（大正９～13年）

学校種	進学先学校名称	大正9年	大正10年	大正11年	大正12年	大正13年	計
専門学校・高師	東京音楽学校				1		1
	日本女子大学校	2	2	2	2	1	9
	津田英学塾	1		1			2
	日本女子歯科医学専門学校				1		1
	東京女子医学専門学校	1					1
	東京女子大学		1	1			2
	京都女子高等専門学校	1			1		2
	女子美術専門学校		3				3
	東京薬学専門学校女子部※1				1		1
	東京女子高等師範学校		2				2
	奈良女子高等師範学校	1		2			3
	計	6	8	6	6	1	27
師範学校・その他教員養成諸学校	長野県松本女子師範学校				5	8	13
	東京府女子師範学校				2	4	6
	群馬県女子師範学校				3	3	6
	福井県女子師範学校		1				1
	計		1		10	15	26
その他中等学校	共立女子職業学校		1	1			2
	愛知高等女子工芸学校※2				1		1
	長野県松代実科高等女学校		1				1
	計		2	1	1		4
高女専攻科・補習科等	実践女学校※3			1			1
	長野県長野高等女学校専攻科				13	21	34
	長野県上田高等女学校専攻科					1	1
	計			1	13	22	36
各種学校	「上田簿記学校」				1		1
	和洋裁縫女学校				2		2
	私立東洋音楽学校		1				1
	自由学園			1			1
	計		1	1	3		5
計		6	12	9	33	38	98

※1 「東京女子薬学校在学」との記載。
※2 「名古屋女子工芸学校在学」との記載。
※3 「実践女学校寄宿舎」との記載。

【図表６】は進学先が記載された者の人数を学校別にカウントしたものである。専門学校と判断したケースでは、東京府の女子専門学校への進学が目立った。学校名を挙げると、「日本女子大学在学」「目白女子大学玉成寮内」などの記載[40]、すなわち日本女子大学校が９名と最多を占めている。また、東京女子大学、東京音楽学校、日本女子歯科医学専門学校、「京都東山女子高等専門学校」（京都女子高等専門学校か）などの記載を確認できた。また、高等師範学校へ進学した者も数名確認できた。記載内容としては、「奈良女子高等師範学校在学」「奈良女子高等師範臨時教員養成所」「東京女子高師在学」「東京女子高等師範学校専攻科」「奈良女子高等師範寄宿舎」などである。長野高女専攻科が設置されるまで、長野県内には、「高等女学校卒業後の県内教育機関としては、補習科を除くと松本女子師範学校第二部と同校付属臨時教員養成所が存在するのみであった」[41] という情況からか、女子高等師範学校のある東京府や奈良県などへ出ている。

このうち、奈良女子高等師範学校臨時教員養成所へ進んだ大正11年（第25回）卒業生の一人が昭和３年の『同協会報』第22号に、「佐渡から」という便りを以下のように寄せている。

いつも御無沙汰致して居ります、昨年の四月卒業と同時に此方の学校へ参りました。丁度一ヶ年余立ちました。自分の見聞き致した事を少しばかり話させて戴きませう。

来る前でした、先生や、先輩の方や、お友達から色々の事を聞かされました。或る人は詩の国だ絵の国だと、又或人は全く辺陬極りなき淋しい離れ島だと、かくて私は様々な想像を胸に画いてそれでも沢山の憧憬を抱いてやつて来ました。上陸致しますと、直ちに広い大い、山の高いといふ事に驚かされます。（中略）新潟から船で参りますと平野の北東岸、両津に着きます。こゝから学校のございます河原田町まで約三里、この道は丁度信州の善光寺平を思はせる様な所です。

（中略）

永い間山の中で育つて来た私に取つて、海の近いといふ事が何よりの事でした。荒海とは申しましても、南の真野湾面は至つて穏やかでして、その上遠浅の為に非常によい海水浴場として知られて居ります。私も昨年は久しぶりに生徒と一緒に海へ入りました、（中略）（佐渡河原田高女より）[42]

「生徒と一緒に海へ入り」、「河原田高女より」などの記述から、新潟県立河原田（かわはらだ）高等女学校の教員であったことが分かる。『長野県長野高等女学校　同協会員名簿　昭和三年度』にも、この卒業生について「佐渡国河原田高等女学校」[43] とある。長野高女卒業後、奈良女高師臨時教員養成所へ進み、その後、高等女学校教員として勤めたと考えられる。

専門学校・高師についで多かったのは師範学校へ進んだ者、26 名であった。学校名を挙げると、長野県松本女子師範学校 13 名を確認できた。ついで、東京や群馬の女子師範学校へも進んでいた。

その他の中等学校は 4 例あり、共立女子職業学校が 2 例、「名古屋女子工芸学校在学」[44]、長野県松代実科高等女学校が 1 例ずつであった。

進学者のうち、最も多かったのは、高等女学校専攻科 36 名で、うち 34 名は長野高女専攻科へ、1 名が上田高等女学校専攻科へ進んでいる。

各種学校へ入学したケースとしては、「上田簿記学校」[45]「和洋裁縫女学校」「自由学園」などの記載がみられた。

【図表 7】は職に就いた者と判断したケースの記載内容である。「小学校訓導」「小学校教員」などの記載があり、多くは県内、特に北信地域で小学校教員として勤めたことをうかがうことができる。「訓導」が大半であり、正規教員であったと判断できよう[46]。教員として勤めた者の大半は小学校教員であるが、大正 10 年の卒業生に 1 名「北海道室蘭高等女学校教諭」[47]、大正 9 年の卒業生に 1 名「名古屋市愛知女子師範学校教諭」[48] とあり、中等学校などの教員となった者があった。「会社等」に分類したケースとしては、銀行勤めや旅館業などを確認できた。

【図表 7】『同協会報』にみる就職先（大正 9 ～ 13 年）

分類	記載内容
中等学校等教員	「愛知女子師範学校教諭」「室蘭高等女学校教諭」
小学校教員	「安茂里小学校訓導」「屋代小学校」「下氷鉋小学校教員」「下氷鉋小学校訓導」「熊岳城小学校」「後町小学校」「黒保根小学校訓導」「佐貫小学校訓導」「坂城小学校訓導」「三野谷小学校訓導」「山王小学校訓導」「小学校教員」「松代小学校訓導」「上室田小学校訓導」「城山小学校教員」「水内小学校訓導」「世良田小学校」「川場小学校訓導」「浅川小学校訓導」「中津小学校訓導」「中野小学校訓導」「鳥居小学校訓導」「入新井第二尋常小学校訓導」「八王子小学校訓導」「穂波小学校訓導」「牧郷小学校訓導」「綿内小学校訓導」「柳島小学校訓導」
その他教育従事	「第三幼稚園」「朝日幼稚園」
その他公務等	「宝光社」※1「日本銀行事務員」「郵便局事務員」「市役所事務員」
会社等	「つるや」※2「安田銀行員」「安田銀行支店」「橋本屋旅館」「実業銀行員」「東雲堂」※3「六三銀行員」
不明	「増花屋」「大津館」

※1 「戸隠宝光社」との記載。
※2 現、株式会社ツルヤか。
※3 東雲堂書店 カ

【図表 5】～【図表 7】をみると、第 19 号発行の直後に教員となった者は少なかったものと考えられる。この間、まず卒業直後に専攻科や師範学校の二部などに進み、その後、教員となっていったという動きをみることができる。【図表 2】の「教員トナリタルモノ」の比率が非常に低いのは、補習科や専攻科などへの進学者に潜在的に教員志望者が含まれていたからだと考えられる。

4.『同協会報』にみる昭和期の進路動向

専攻科設置（大正13年４月）より４年後、専攻科の卒業生が出た。昭和３年２月発行の『同協会報』中、「専攻科だより」では、「本年度卒業生」との見出しで「本校専攻科では、今年はじめて二十一名の第一回卒業生を出しました。卒業生の卒業後の状態は、次のやうです。」とあり、進路についての情報が以下のように記されている。

本校に就職せら(ママ)た方　　一
小学校に就職せられた方　　一三
家庭に入られた方　　六
其の他　　一[49]

先の【図表６】にも見た通り、長野高女専攻科への進学は主流の一つであった。しかし、この専攻科は短命であった。昭和３年２月10日、松本・上田の両高等女学校専攻科には中等学校教員資格が認められたが、長野高女の国語科には認められなかったのである[50]。３年制の課程では国語科の中等教員の資格がないということであった[51]。そこで、昭和４年、それまでの専攻科を発展的に解消した長野県女子専門学校が設置され、ここに専攻科生徒を編入させた[52]。本科３年と研究科１年の課程を設けて国語科中等教員の養成を狙った[53]。昭和７年６月の『同協会報』第24号には「女子専門学校の移転」として以下のような記述がみられる。

長野県女子専門学校は昭和四年四月創立以来母校南校舎二階に設けられてありましたが、昭和五年市内三輪町の北裏に八千坪の地を相して新築に着手翌六年七月までに本館及附属建物の一、二落成したるを以て同十月十一日全部新校舎に移転しました其後体操室音楽室等出来上り十一月二十一日盛大な祝賀式が挙げられ続いて二十二日二十三日と音楽会及バザー等も行はれました尚昭和六年□（約2文字分空白―筆者註）□月同校研究科卒業生に対し中等学校国語科教員無試験検定の資格を与へらるゝ事にら(ママ)りました[54]

すなわち、長野県女子専門学校が昭和４年４月に創立され、それ以来、長野高女「南校舎二階に設けられて」いたこと、その翌年の昭和５年、「市内三輪町の北裏」への新築が着手され、翌昭和６年「十月十一日全部新校舎に移転し」、11月21日には「盛大な祝賀式が挙げられ」た。そして、「同校研究科卒業生に対し中等学校国語科教員無試験検定の資格を与へらる」という宿願を果たした、ということが綴られている。しかし、中等教員になる者は少なく、多くは小学校教員として就職したと、『長野県教育史』には記述されている[55]。

長野県女子専門学校設置前後の進路について検討する。【図表８】【図表９】は昭和２年、３年、６年の卒業生の進路を示したものである。昭和２年、同３年の卒業生については昭和３年の『同協会員名簿』[56]から、昭和６年の卒業生については、昭和７年の『同協会報』[57]巻末に示されている名簿から作成した。【図表８】

【図表８】『同協会報』等にみる卒業生進路（昭和２年､3年､6年卒業）

卒業年	進学･その他の学修					就職等					記載なし	計
	専門学校・高師	師範学校・教員養成諸学校・その他	高女専攻科・補習科等	各種学校	計	小学校教員	その他教育従事	会社等	その他	計		
昭和２年	6	8	10	4	28	1	1		3	5	108	141
昭和３年	9	8	23	1	41			1	2	3	132	176
昭和６年	13	3	3	5	24				1	1	192	217
通算	28	19	36	10	93	1	1	6	1	9	432	534
(比率)	(5.2%)	(3.6%)	(6.7%)	(1.9%)	(17.4%)	(0.2%)	(0.2%)	(1.1%)	(0.2%)	(1.7%)	(80.9%)	(100.0%)

〔昭和６年卒業者については、長野高等女学校同協会編『同協会報　渡邊先生頌徳号　第二十四号』(昭和７年、88-97頁)を、昭和２〜３年卒業者については、『長野県長野高等女学校　同協会員名簿　昭和三年度』を基に作成。【図表9】も同じ。〕

の通り、先に示した大正期と同様、卒業後の進路について記載のないケースが80％余りを占めている。記載内容のあった限りで進路をみる。

【図表9】の通り、専門学校・高師と判断できたケース28例を確認できた。単に「女子専門在学」などの記載があったものは長野県女子専門学校とみなした。同校への進学が日本女子大学校を抜いて9名と最多であった。長野県女子専門学校の前身である長野高女専攻科をみると昭和2年で6名、昭和3年で9名となっており、合わせると24名となる。師範学校・その他教員養成諸学校のうち最も多かったのは、長野県松本女子師範学校の18名であった。高女専攻科・補習科等への進学をみると、長野高女専攻科についで長野県長野実科高等女学校専修科（「長野実科専修科」などの記載）や実践女学校専攻科へ進んだ者が多かった[58]。

長野県女子専門学校入学者の出身高女について確認する。【図表10】は、長野県女子専門学校同窓会編『昭和十三年度　同窓会報　第七号』[59]巻末に掲載されている「会員名簿」から作成したものである。この「会員名簿」には、卒業者の氏名などとともに「出身高女」が掲載されている。「本科第一回卒業生」（昭和5年3月卒業）から「本科第九回卒業生」（昭和13年3月卒業）までの「通常会員」、194名についての出身高等女学校について検討する[60]。【図表10】から、約半数（94名・48.5％）は長野高女出身者であったことが分かる。長野高女についで、須坂高等女学校からの入学生が多く14名であった。大正15年6月に長野電気鉄道の権堂駅（現長野市鶴賀権堂町）―須坂駅間が開通し、昭和3年6月には長野線が全通しており[61]須坂からの通学がより簡便になったと思われる。76名・39.2％は長野高女以外の県内高女出身者であった。また、県外高女出身者は24名・12.4％であった。

なお、図表として示してはいないが、就職等と判断したケースは、小学校教員（「三輪小学校」）、その他の教育従事者（「二葉補（ママ）育園」）、会社等に

【図表9】『同協会報』等にみる進学先学校名称（昭和2年、3年、6年卒業）

進路分類	進学先学校名称	昭和2年	昭和3年	昭和6年	計
専門学校・高師	長野県女子専門学校			9	9
	日本女子大学校	3	3	2	8
	津田英学塾	1		1	2
	帝国女子専門学校	1			1
	東京女子医学専門学校			1	1
	東京女子大学		1		1
	東京女子専門学校		3		3
	実践女子専門学校	1	1		2
	帝国女子医学薬学専門学校		1		1
	計	6	9	13	28
師範学校・その他教員養成諸学校	第六臨時教員養成所	1			1
	長野県松本女子師範学校	7	8	3	18
	計	8	8	3	19
高女専攻科・補習科等	山脇高等女学校専攻科等	2			2
	実践女学校専攻科等	1	4	1	6
	長野県長野高等女学校専攻科	6	9		15
	長野県長野実科高等女学校専修科		7		7
	長野県松本高等女学校専攻科			1	1
	長野県上田高等女学校		1		1
	長野県上田高等女学校専攻科	1	2	1	4
	計	10	23	3	36
各種学校	女子高等学園	2		1	3
	東京家政学院	1	1	3	5
	東京女子体操音楽学校			1	1
	自由学院	1			1
	計	4	1	5	10
計		28	41	24	93

【図表10】長野県女子専門学校本科卒業生の出身高等女学校

高女所在地	出身高女	昭和5年卒	昭和6年卒	昭和7年卒	昭和8年卒	昭和9年卒	昭和10年卒	昭和11年卒	昭和12年卒	昭和13年卒	計
県内	長野	4	7	16	16	9	10	10	9	13	94
	松本		1	1	1					2	5
	上田		2				2	1			5
	飯田			1			1				2
	諏訪	1		1		1					3
	野沢			1		1			1	1	4
	伊那		1				1		2		4
	大町								1		1
	飯山			1	1				2	3	7
	豊科						2	2			4
	篠ノ井	1		1	1	1		1	4		9
	小諸			1		1	1				3
	木曽							3		1	4
	須坂	4	1	2	1	1		2	1	2	14
	中野		2	1				1		2	6
	松代								1	3	4
	屋代					1					1
県外	群馬伊勢崎					1					1
	群馬吾妻				1						1
	群馬前橋							1			1
	広島土肥					1					1
	新潟高田							1			1
	新潟新津									1	1
	新潟新発田					4	1				5
	千葉大原				1						1
	大阪宣真									1	1
	東京文華				1						1
	東京立教					1					1
	栃木宇都宮						1				1
	栃木大田原								1		1
	富山				1						1
	富山氷見						1	1			2
	福井敦賀						1				1
	福岡小倉								1		1
	福島会津									1	1
	（記載なし）		1								1
計		10	15	26	24	22	21	23	23	30	194

（長野県女子専門学校同窓会編『昭和十三年度　同窓会報　第七号』、昭和13年12月、巻末「会員名簿」を基に作成。）

勤めた者（「魚清商店」）がそれぞれ１名ずつであった。「栽松院」「十念寺内」「養林寺内」「同照坊内」「白蓮坊」などの記載があったケースはその他に分類した。

【図表 11】は、昭和 10 年６月の『同協会報』第 26 号に掲載されていた「上級学校入学者」[62] である。「母校卒業生中本年新に上級学校に進みたるもの八十七名其内長野市以外の地にある学校に入学せられた諸姉の氏名を次に掲げます。」として、進学先と氏名が掲載されている。【図表 11】にはまとめて示したが、まず、「長野市以外」の学校へ進んだ者が示され、その後に、「長野実科高等女学校　三十三名」「長野女子専門学校　十四名」と記されている。【図表 11】の通り、87 名の内訳をみると、東京女子医学専門学校など「長野市外」が 40 名、長野実科高等女学校（以下、単に「実科高女」とする）と長野女子専門学校とを合わせて 47 名となっており、半数以上が市内の学校に進んだことが分かる。なぜ「上級学校入学者」に実科高女の記載があるのかについては、同校の『記念誌　創立二十周年』中、以下の記述から示唆が得られる。

【図表 11】「上級学校入学者」（昭和 10 年）

学校種	進学先	人数　(比率)
専門学校	東京女子医学専門学校	2 (2.3%)
	東京薬学専門学校	1 (1.1%)
	実践女子専門学校	6 (6.9%)
	共立女子専門学校	3 (3.4%)
	日本女子体育専門学校	1 (1.1%)
	長野県女子専門学校	14 (16.1%)
	日本女子大学校	1 (1.1%)
	帝国女子医学薬学専門学校	1 (1.1%)
	京都女子高等専門学校	1 (1.1%)
	計	30 (34.5%)
師範学校・その他教員養成諸学校	東京女子高等師範学校	3 (3.4%)
	長野県松本女子師範学校	5 (5.7%)
	計	8 (9.2%)
高等女学校・実業学校等の中等学校	長野県長野実科高等女学校	33 (37.9%)
	松本女子職業学校	2 (2.3%)
	高崎実践女学校※	2 (2.3%)
	計	37 (42.5%)
各種学校	ドレスメーカー女学院	2 (2.3%)
	文化裁縫女学校	3 (3.4%)
	駿河台女学院	3 (3.4%)
	昭英学園	2 (2.3%)
	東京家政学院	2 (2.3%)
	計	12 (13.8%)
計		87 (100.0%)

※「高崎実践高等女学校」との記載。
（長野高等女学校同協会編『同協会報』第 26 号、昭和 10 年、42-43 頁を基に作成。学校種・比率は筆者が付記した。）

（前略）大正何年であつたか、長野高女の卒業生が数人進んで補習科へ入学するやうになり又補習科修業生が裁縫専科正教員の検定試験に大部分合格するやうになつてめつきり学校が世の注目をひく様になつて来たのであります。（後略）[63]

『長野県教育史』にも、実科高女補習科を終えると、「小学校裁縫家事専科正教員試験検定に、裁縫科ほか普通学科の試験を欠くことができ」[64] るとある。また、『記念誌』中、「長野県長野実科高等女学校沿革」には、「昭和二年」に「四月一日高等女学校卒業生ノタメ専修科ヲ設ク」、「昭和八年」に「四月専修科を補習科一年菊組トス」[65] とある。先に挙げた『長野県長野高等女学校　同協会員名簿　昭和三年度』にも「長野実科専修科」との記載がある卒業生がみられた。以上のことから、「三十三名」というのは、実科高女の補習科へ進んだ者が掲載されたものと考えられる。

【図表 9】【図表 11】により、昭和のはじめ 10 年間ほどを見てみると、専門学校進学者が増加しており、長野県女子専門学校の設置が女子の高等教育機会を広げたと言えよう。また、同校について、『長野県教育史』では、「卒業生の過半が教員になっており、実質上は教員養成機関であり、一面家居がかなりいることからみて、半ば花嫁学校的性格をも併せもっていたといえよう」[66] と述べている。

最後に「常設卒業生指導講習会」について述べる。「花嫁学校」という性格については、昭和 14 年の『同協会報』第 29 号に示された以下の記述からもうかがうことができる。

久しく父兄側も学校側も要望して居て容易に実現せざりし卒業生長期指導講習会は、いよ／＼昭和十三年四月十六日から開講致しました。希望者は二十名で、数に於ては多いと申されませんが、集つ

た人々は熱心に真摯な態度で課業を履修しました。裁縫は吉村教諭が専任指導に当られ、その外常識講座、婦人須知、国民精神講座等には、市内からそれ〻の道の大家を聘して講義を願ひました。[67]

この講習会は昭和13年4月16日から開講し、20名の希望者があった。「一週間の課目時数及び講義を願つた講師と題目」については、「裁縫」15時間、「国民精神講座」2時間、「手芸」4時間、「常識講座」2時間、「家事」2時間、「婦人須知講座」2時間、「体操」1時間、「華道」2時間であった。これに加え、「音楽、習字、図画」が「三週に各一」とある。「常識講座」および「婦人須知」については、講師と題目が以下のように記されている。

○常識講座
一、乙部図書館長　図書館常識
一、小林長野駅長　鉄道常識
一、小野市農会技手　長野市の農業
一、荒井特高課長　思想問題に就いて
一、西澤信毎編輯長　新聞常識
一、佐々木放送局長　放送事業の概況
一、飯田社会教育主事　社会教化に就て
一、中山盲唖学校長　盲聾唖の教育
○婦人須知
一、市邊校医（眼科）　二時間
一、水村校医（歯科）　二時間
一、鈴木日赤小児科医長　十時間
一、小山産婦人科医　十時間[68]

また、この講習会について、「講習生の父兄中より」「教育的効果につき意外の讃辞を送られ且つ将来に対し熱心なる激励を賜る向きもあり」「一段の改善を加へ内容の充実を計」[69]るために「講習会々則」が設けられた、と記されている。

「長野高等女学校卒業生長期指導講習会々則」の第一条には、「本講習会ハ本校卒業生ニ対シ将来主婦トシテ必要ナル家庭上ノ知識技能ヲ授ケ高尚ナル趣味ヲ養ヒ醇良ナル婦徳ヲ涵養シ実社会的教養ヲ完カラシムルヲ以テ目的トス」[70]とある。会員の定員は「約三十名」（第二条）、「修養期間」は「一箇年」であった（第三条）。講習科目やその課程、毎週の教授時数は【図表12】のようであった（第五条）。家事や裁縫、手芸でおよそ65％を占めていた。

『長野県教育史』には「長野高女では私設補習科を設けたほか、同窓会名儀（ママ）の私設補習科を設ける例」[71]があったと述べられているが、この講習会を指すものと思われる。

【図表12】「卒業生長期指導講習会（常設）教科課程」

講習科目	毎週時数	（比率）	要旨及要項
修養講座	2	(6.5%)	国民精神ノ陶冶、人生観ノ確立、母性ヲ中心トスル教育的意義、学校教育、家庭教育、幼稚園保育等ノ理会ヲ主眼トス
家事講座	4	(12.9%)	主婦ノ中心作業タル家政一般ヲ授ケルモ特ニ料理、割烹、洗濯等ノ実習ニ熟練セシムルヲ主眼トス
裁縫講座	12	(38.7%)	私服ノ調製修理利用及洋裁（児童用）並ニ手芸ノ一般ニ習熟セシメンコトヲ主眼トス
手芸講座	4	(12.9%)	
婦人衛生講座	1	(3.2%)	婦人ノ生理衛生ヲ中心トシテ育児、小児病知識、看護法一般、マツサージ等ノ知識ト理会ヲハカラントス
常識講座	1	(3.2%)	健全ナル常識教養ヲナスタメ図書館知識、鉄道知識、銀行社会教化事業法並ニ実際乃至非常時立法等ノ解説ヲナシ其他簿記、珠算等現代ニ即スル生活常識ヲ充実スルヲ主眼トス
体育講座	1	(3.2%)	体育保健ノ実習
趣味講座	5	(16.1%)	華道、茶道、歌道、音楽、園芸、習字、図画其他ノ高尚ナル趣味向上ヲハカラン事ヲ主眼トス
其他	1	(3.2%)	必要ニ応ジ臨時講座トシテノ施設ヲナシ本会ノ目的ヲ充実スルヲ主眼トス
計	31	(100.0%)	

（『同協会報』第29号、昭和14年5月、32～33頁より作成。なお、縦書きを横書きに改め、漢数字を算用数字に改めた。また、比率は筆者が付記した。）

おわりに

長野高女における卒業生の進路、およびその背景について、以下の点を整理しておく。

第一に、長野市の地域的な特色として推察できるのは、商業や公務自由業という「社会層」が多くを占めており、女子中等教育への需要が高かったこと、高等女学校へ進学させ、さらに補習科や専攻科へ進ませる、あるいは東京府の専門学校等へ進学させるほどの家計の経済力があったことである。

第二に、本稿でみた時期に限るが、「職業資格」については、ほぼ教員に限定されていたことである。ただし、本稿で扱った時期は昭和 10 年までである。【図表 2】から、その後、会社等への就職は増加したものと思われる。

第三に、その教員志望者についてである。長野高女の設置以来、明治期の十数年の間は、女子高等師範学校の受験準備機能をもつ補習科への入学者が主流をなしていた。しかし、補習科の廃止と専攻科の新設、さらに、その専攻科を発展的に解消して設置した女子専門学校が設置されたことにより、中等教員への道が開かれた。『長野県教育史』でも、「普通教育機関である高等女学校は、以前より上級学校への進学機関としての、また、教員輩出の一階梯としての機能をもっていた」[72] と指摘されている。実際の進路をみると、若干の中等教員はみられたが、多くは「小学校訓導」などと記載されていた。勿論、中等学校教員（長野県女子専門学校は国語科）の需要について考えねばならないが、中等学校教員の「職業資格」を得ながら、有効に活かされない「金箔」であったと捉えられよう。しかし、小学校教員の養成、特に訓導の輩出に貢献したことは間違いなく、信濃教育を牽引したことには注目せねばならない。

また、卒業生の名簿にみる限り、大半に進路に関する記載がないこと、先に示した「卒業生長期指導講習」の内容から、昭和 13 年においても依然として、「将来主婦として家庭上並に社会的教養上必要なる」[73] 素養を身につけるという長野高女への「教育期待」があったとも捉えられよう。

註

1）「同協会」は明治 38 年 9 月に創設され、翌 39 年 4 月に「第一回会報」を発刊した（長野県長野高等女学校編『創立四十年　特輯号』長野県長野高等女学校創立四十周年記念会、昭和 12 年、26 頁参照）。「同協会」の「本旨」は「母校精神の擁護宣揚、母校精神の補促発展、母校を背景としての自己発展を趣旨として活動促進する」（同、11 頁）ことと記されている。なお、史料を引用する際は、人名などを除き、旧字体は新字体に改めた。また、引用・参照する著作や史料の発行年の和暦・西暦については奥付のままとした。

2）花井信『製糸女工の教育史』大月書店、1999 年、6-14 頁参照。

3）近世後期以降、信濃の養蚕は盛んであったが、近代の長野市では製糸業が発達しなかったと言われる（「角川日本地名大辞典」編集委員会編『角川日本地名大辞典　20　長野県』角川書店、1990 年、819 頁参照）。また、県都である長野市には、「県の中枢機関だけでなく、中央官庁の出先機関、新聞社、学校、銀行などが集中」（「長野（市）」相賀徹夫編著『日本大百科全書　17』小学館、昭和 62 年、449 頁）しており、後に示す【図表３】中の「公務自由業」比率の高さに表れている。

4）深谷昌志『増補　良妻賢母主義の教育』黎明書房、昭和 56 年。「良妻賢母」について、小山静子は『良妻賢母という規範』（勁草書房、1993 年）の中で、「良妻賢母主義思想という言葉には戦前日本の特殊な女性観というイメージ」（同書、8 頁）があるとして、欧米をも含めた「『近代』の思想としてとらえ」（同書、7 頁）るため「良妻賢母思想」という言葉で論じた。傍点は本稿筆者。

5）天野郁夫・浜名篤・吉田文・広田照幸「戦前期中等教育における教養と学歴―篠山高等女学校を事例として―」『東京大学教育学部紀要』第 29 巻、1989 年、53-80 頁。

6）前掲、天野郁夫ら「戦前期中等教育における教養と学歴」、72 頁。
7）同前。
8）同前、参照。
9）水野真知子『高等女学校の研究（上）（下）―女子教育改革史の視座から―　野間教育研究所紀要第 48 集』野間教育研究所、2009 年。
10）前掲、水野真知子『高等女学校の研究（下）』、26 頁。
11）前掲、水野真知子『高等女学校の研究（下）』、29 頁。
12）井上好人「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能―石川県立第一高女同窓会誌の『会員消息』記事の分析から―」日本教育社会学会編『教育社会学研究第 83 集』東洋館出版、2008 年、149-168 頁。
13）土田陽子「地方における高学歴女性のライフコース選択―県立和歌山高等女学校の事例から―」『紀州経済史文化史研究所紀要　第 37 号』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2016 年、1-16 頁。
14）前掲、土田陽子「地方における高学歴女性のライフコース選択」、13 頁。
15）井本佳宏「戦前期における女子中等教育システムの形成とその構造―システム理論からのアプローチ―」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 55 集第 1 号、2006 年、105-117 頁参照。
16）以下、明治 20 年代から同 30 年代の高等女学校設置については、長野県教育史刊行会編『長野県教育史　第二巻　総説編二』長野県教育史刊行会、昭和 56 年、467-473 頁を参照した。以下、同書を引用・参照する際は、「『長野県教育史　第二巻』、467-473 頁。」のように略記する。
17）「長野」『国史大辞典　第十巻』吉川弘文館、平成 9 年、625 頁参照。
18）百周年記念誌編集委員会編『百年のあゆみ』長野県長野西高等学校、平成 8 年、7 頁参照。
19）『長野県教育史　第二巻』、469 頁。
20）長野県教育史刊行会編『長野県教育史　第三巻　総説編三』長野県教育史刊行会、昭和 58 年、314-315 頁参照。以下、同書を引用・参照する際は、「『長野県教育史　第三巻』、314-315 頁参照。」のように略記する。なお、高等女学校の県立化は長野県が最も遅かったとされる。
21）長野県立長野高等女学校編『明治四十四年五月　長野県立長野高等女学校一覧』、明治 45 年 2 月、同編『明治四十五年五月　長野県立長野高等女学校一覧』、大正元年 12 月（国立国会図書館デジタルコレクション）。
22）収集した『同協会報』等は、以下の通りである。
　長野高等女学校同協会編『同協会報』第 19 号、大正 13 年（県立長野図書館蔵）
　同編『同協会報』第 22 号、昭和 3 年（県立長野図書館蔵）
　同編『同協会報　渡邊先生頌徳号』第 24 号、昭和 7 年
　同編『同協会報』第 26 号、昭和 10 年
　長野県長野高等女学校創立四十周年記念会編『創立四十年特輯号』、昭和 12 年
　長野高等女学校同協会編『同協会報』第 29 号、昭和 14 年（県立長野図書館蔵）
23）百周年記念誌編集委員会編『百年のあゆみ』長野県長野西高等学校、平成 8 年。以下、同書を「『百年のあゆみ』」と略記する。
24）『百年のあゆみ』、253 頁。
25）「三水小学」は三水尋常高等小学校か（文龍館編『長野県市町村提要　全』文龍館、大正 7 年、「上水内郡」の 29 頁参照）。補習科を経て、小学校教員となるケースは岐阜県大垣高等女学校においてもみられた（烏田直哉「岐阜県大垣高等女学校における卒業生の進路―『同級消息』欄の記述内容を中心に―」スポーツ健康科学部教育研究紀要委員会編『東海学園大学教育研究紀要』第 6 号、2021 年、40-55 頁参照）。

26）文部省普通学務局編『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』、大正５～昭和15年（国立国会図書館デジタルコレクション）。
27）『長野県教育史　第三巻』、353-358頁参照。
28）『長野県教育史　第三巻』、353頁。
29）前掲、花井信『製糸女工の教育史』、59-98頁参照。
30）『百年のあゆみ』、10頁。
31）長野県長野西高等学校創立七十周年記念会編『七十年のあゆみ』長野県長野西高等学校、昭和41年、81頁。なお、斉藤利彦・市川雅美「旧制中学校における校友会雑誌の研究」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻、2008年、435-461頁）では、旧制中学校の「校友会雑誌の名称」について、「大正期になると、校友会名に基づいた名称より、それ以外の名称の方が優勢となっていく」（447頁）と指摘されている。
32）長野高等女学校同協会編『同協会報　第十九号』長野高等女学校同協会、大正13年７月、19-28頁。以下、同誌を引用する際は、「『同協会報』第19号、大正13年７月、19-28頁。」のように略記する。なお、ここに掲載された数字は「大正十三年三月卒業式当日報告になつたもの」（同、22頁）とされている。
33）『長野県教育史　第三巻』、330頁。
34）『長野県教育史　第三巻』、331頁。
35）『同協会報』第19号、大正13年７月、２頁。
36）『長野県教育史　第三巻』、331-332頁参照。
37）『長野県教育史　第三巻』、357頁参照。
38）『長野県教育史　第三巻』、357頁。
39）『同協会報』第19号、大正13年７月、巻末。
40）「東京小石川区目白女子大学玉成寮内」との記述から日本女子大学校と判断した（山川菊栄『東洋文庫203　おんな二代の記』平凡社、1981年、320頁参照）。
41）『長野県教育史　第三巻』、331頁。
42）『同協会報』第22号、昭和３年２月、22-25頁。
43）長野県長野高等女学校同協会編『長野県長野高等女学校　同協会員名簿　昭和三年度』、76頁。
44）名古屋市中区東橘町にあった愛知高等女子工芸学校をさすものと判断した（愛知県教育委員会編『復刻版　愛知県教育史　第四巻』第一法規出版、昭和57年、743頁参照）。
45）「上田簿記学校」とあるのは、後に商業学校として認可を申請した私立上田大原簿記学校か〔「各種学校台帳（商業）・一」参照（国立公文書館デジタルアーカイブ）〕。
46）日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』平凡社、昭和46年、202頁参照。
47）『同協会報』第19号、大正13年７月、44頁。
48）『同協会報』第19号、大正13年７月、39頁。
49）『同協会報』第22号、昭和３年２月、38頁。
50）『長野県教育史　第三巻』、332頁参照。
51）『長野県教育史　第三巻』、458頁の引用史料『信濃毎日新聞』参照。
52）『長野県教育史　第三巻』、332頁参照。
53）『長野県教育史　第三巻』、463頁参照。
54）『同協会報』第24号、昭和７年６月、62頁。
55）『長野県教育史　第三巻』、464頁参照。
56）長野県長野高等女学校同協会編『長野県長野高等女学校　同協会員名簿　昭和三年度』、昭和３年。

57）『同協会報』第 24 号、昭和 7 年 6 月、巻末名簿。
58）「実践女学校第一寄宿舎内」「実践高等女学校（技芸料）」「実践女学校専攻科」「山脇高女家事科寄宿舎」「山脇高等女学校専攻科」「上田高等女学校寄宿舎」などの記載は、【図表 9】において高女専攻科・補習科等に分類した。実践女学校は、昭和 7 年に「実践女学校各部の名称を実践高等女学校、実践女子専門学校、実践実科高等女学校と改称」〔実践女子学園中学校高等学校ホームページ「沿革」（https://hs.jissen.ac.jp/about/history/index.html：令和 3 年 9 月 30 日閲覧）〕したとあり中等、高等教育機関を擁する学園となった。「実践女学校専問部」と明記されているものは専門学校・高師に分類した。
59）長野県女子専門学校同窓会編『昭和十三年度　同窓会報　第七号』長野県女子専門学校同窓会、昭和 13 年 12 月、巻末「会員名簿」。
60）なお、「長野県長野高等女学校専攻科卒業生」として「準会員」も掲載されており、「第一回卒業生」（昭和元年度）から「第三回卒業生」（昭和 3 年度）の氏名が掲載されている。
61）「長野電鉄長野線」「角川日本地名大辞典」編集委員会編『角川日本地名大辞典　20　長野県』角川書店、1990 年、821 頁参照。
62）『同協会報』第 26 号、昭和 10 年 6 月、42-43 頁。
63）長野県長野実科高等女学校編『記念誌　創立二十周年』長野実科高等女学校、昭和 15 年、6 頁。以下、同誌を引用・参照する際は、「『記念誌』、6 頁。」のように略記する。
64）『長野県教育史　第三巻』、357 頁。
65）『記念誌』、2-3 頁。『長野県教育史』ではこの専修科について、「昭和七年の『長野県長野実科高等女学校要覧』によると、補習科内に高等女学校本科卒業生のための専修科一年制を設け、一週三三時間中裁縫に一八時間、家事・手芸・教育に一〇時間を充て、補習科の上に研究科を設ける等、独特の運営を試みていた。」（『長野県教育史　第三巻』、346 頁）と記述されている。なお、実科高女の『記念誌』巻末「昭和十五年十月　会員名簿」から、補習科 1 年「昭和十一年三月修業」生について、その住所、出身高等女学校名と思われる学校名、氏名を把握できる。彼女らの氏名と、長野高女の『同協会報』第 26 号（昭和 10 年 6 月）巻末の「新入会員（昭和十年三月卒業生）」氏名とを照合したところ、長野高女を昭和 10 年 3 月に卒業した者のうち、『記念誌』に「長野高女」と記載のあった者を、少なくとも 29 名確認できた。
66）『長野県教育史　第三巻』、466 頁。
67）『同協会報』第 29 号、昭和 14 年 5 月、31 頁。
68）同前。
69）同前。
70）『同協会報』第 29 号、昭和 14 年 5 月、32 頁。
71）『長野県教育史　第三巻』、331 頁。
72）『長野県教育史　第三巻』、358 頁。
73）『同協会報』第 29 号、昭和 14 年 5 月、32 頁。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、川口雅昭皇學館大学教授、矢田貞行東海学園大学教授に御指導賜った。また、史料調査にあたり、土井秀夫陽炎堂店主、草間義一郎松信堂店主、国宝旧開智学校校舎の遠藤正教様、川上由紀子様、百瀬也寿之様、加藤史絵様、松本市歴史の里主任学芸員須永瑞希様に御高配・御助言を賜った。ここに謝意を表する。なお、本稿は、日本職業教育学会第 2 回大会（オンライン開催、幹事校・関西女子短期大学）「分科会Ａ　職業教育の歴史研究」部会で令和 3 年 10 月 3 日に行った研究報告「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」に加筆修正したものである。